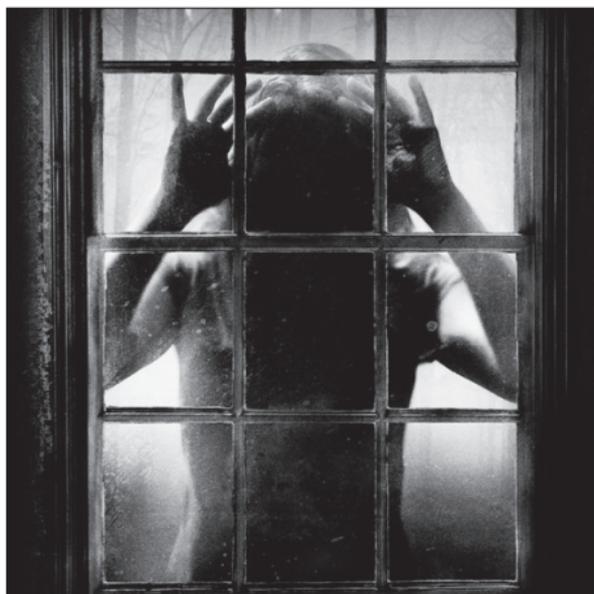


# 窓をたたく音

ダイナ・マロック



私は幽霊をほとんど信じていません。幽霊なんか有害無益だからです。直接関係もないのに、何の目的もないのに——要するに、滑稽千万にやって来る——正確には、やって来ると言われているので、この世に関する常識も、あの世についての超自然的な感覚も、どちらも幽霊とは両立しません。ですから、たとえ「素晴らしい幽霊物語」であっても、十中八九は簡単な説明で片がついてしまします。そして、もっともらしい説明がつかない残り十分の一ないし二の場合でも、「事実」と呼ばれる例のつかみ所のないものを捕らえることは、どんな社会でも非常に難しいので、その点がちゃんと分かっている人はみな、半信半疑に首を振りながら、「証拠だ！これは証拠が必要な問題なんだ！」と声高に叫ぶ傾向があるのです。

しかし、私が信じようとしなないのは、(俗に「幽霊」と呼ばれている)まったく実体のない靈魂が、人体を持つ靈魂(人間)に対して不思議な影響を及ぼす可能性、あるいは奇々怪々な伝達を行なう可能性——不可能性の方がずっと大きいと思うですが、そうした可能性——に対する軽蔑のこもった懷疑心のためではありません。二本足(人間)が自分の頭脳で生み出した平凡な法則などによって、「天上と地上と地下のもの」<sup>(1)</sup>を測定しようとする、そんな賢者ぶった連中は盲人よりもだまされやすく、子供よりも無知だと言えるでしょう。私たちは宇宙の謎について「説明できないから、受け入れがたい」と主張するほど、それほど厚顔無恥ではないはずですよ。

私は、これらの見解を（ただ単に見解としてですが）前もって述べ、今から自分にとつて本当に完璧な幽霊物語だと思える話をするつもりです。その外的証拠と状況証拠は論駁ろんぱくの余地がありません。それに対し、心理的な因果関係の方は説明すること自体が容易ではないので、説明して片づけるとなると、さらに難しいような気がします。それはハムレットの幽霊のように「真正正銘の幽霊」<sup>(2)</sup>でした。その幽霊には娘さんがおられ、今では年老いた御婦人になっておられますが（彼女の実に素晴らしい記憶力に神の祝福があらんとを！）——これまですつと、ありとあらゆる神秘についての知識を身につけてこられた、この老婦人から私は次のような真実の話を聞いたのです。

その老婦人（マッカッサ夫人）が「あのね」と私に言われたのは、例のテーブル動かしが流行した初期の頃<sup>(3)</sup>——死んだ祖先を食卓に呼び戻すという考えや、帽子をひよいと動かしたり、皿をぐるぐると回したりすることで、天上界の不思議なことが分かるという考えが、若者に嘲笑される一方で、老人にシヨックを与えていた頃——でした。老婦人は「あのね」と言つて、話を続けてくださいました。「私は幽霊の話を興味本位でしたいとは思いませんのよ」

「なぜでしょうか？ 幽霊の存在を信じておられないのでしょうか？」と、私は尋ねました。

「少しは信じております」

「これまで御覧になったことは？」

「一度もありません。でも、一度だけ音を聞いたことが……」

畏敬の念からなのか、物笑いになるのが怖いからなのか、老婦人は幽霊の話をしたくないかのように、真剣な顔をしておられました。でも、この優しい老婦人が幻影を見られたとしても、誰も笑うことなどできなかつたでしょう。生きた人間に皮肉や辛辣なことを言われたことなど一度もない方なのですから。多くの常識をたくわえ、驚くこともほとんどなく、想像を好む傾向もない人が、このような畏敬の念をはっきりと持つことは、かなり珍しいのではないかと思います。

私はマツカッサー夫人の幽霊物語にとっても好奇心をそそられました。

「あのね、それはずいぶん昔のことです——昔すぎて、私那时的状況を忘れてしまい、記憶がゴチャゴチャになっていると思うかもしれませんね。でも、そんなことはありませんよ。十代の頃に起こったことの方が——そのとき私は十八でしたが——最近あった多くの出来事よりも、はつきりと記憶に残っているのではないか、そんなふうに思うことが時々あります。さらに、その頃のことを全部あざやかに思い出せる理由が、いくつか他にもあったのです。その当時、私は恋をしていましたのよ、ホントに」

若いからといって、そんなことは信じられないとか、滑稽だとか思わないでちょうだいと懇願するような、そうした穏やかな笑みを浮かべて夫人は私を見ておられました。とん

でもありません。私は興味津々で身を乗り出しました。

「マッカッサー氏ですね、それは」と、私は何の疑念もなく尋ねました。私自身、誰でも初恋の人と結婚するのが現実世界の道徳律なのだと思います、それが不変の真理だと信じてしまふ、そんな純真無垢な年頃の娘だったのです。

「いいえ、あなた。マッカッサー氏ではありませんよ」

私はとても驚き、口もきけないほど仰天しました。というのは、この老婦人については私はロマンスのようなものを作り上げていたからです。それで、まるまる五分間、マッカッサー夫人に黙って編み物をさせてしまいました。夫人が少しほほえんで、次のようにおっしゃった時も、まだ私は驚いたままでした。

「その方は有能な若い紳士で、私のことがそれはもう大好きで、誇りにしておられたようです。だって、そんなふうには思わないかもしれませんが、当時の私はホントに美人だったのよ」

疑うなんて滅相ありません。ほっそりした、しなやかな姿形、小さな手足。マッカッサー夫人の後ろを歩けば分かることですが、未だに若い女性だと間違えるほどでした。私たちの世代よりは、前の世代の方が、生活はゆったりとして、ゆとりがあったことは確かです。

「そうですね、私はバース<sup>(4)</sup>の小町娘だったのですよ。そこでエヴェレスト氏が私に恋を

したのです。私も本望でした。なぜなら、ちようどミス・バーニーの『セシリア』<sup>(5)</sup>を読  
んでいて、彼はモーティマー・デルヴィルそっくりだと思つたからなの。『セシリア』つ  
て、とてもすてきな物語ですね。お読みになつた？」

「いいえ」と私は答え、マツカッサー夫人の物語へ話題を戻すために、彼女にエヴェレ  
ストという名の恋人がいた事実と、彼女が今はマツカッサー夫人だという事実を一致させ  
ることのできる唯一の結論へ、次のように一足飛びしました。

「御覧になつたのは、その方の幽霊なのですね？」

「いえ、いえ、あなた。あなたがたいことに、彼はまだ生きています。ここへも時おり訪  
問なさいますよ。今も私の家族の良き友です。ああー」半ば嬉しそうに、半ば悲しげに、  
夫人は頭をゆっくりと振りながら、おっしやいました。「とても美丈夫<sup>びじょうぶ</sup>だつたなんて、お  
信じにならないでしょうね、あなた」

この古い言い回しは、前世紀の小説や私たちの曾祖母の恋人に付き物の表現でしたから、  
一笑に付すことなんかはできません。私は我慢して、幽霊物語をさらに遅らせそうな、と  
りとめのない思い出の話に耳を傾けました。

「でも、マツカッサー夫人、私に話そうとなさつておられるものですが、それを見たり  
聞いたりされたのは、バースだつたのではないですか？ 幽霊の話ですよね？」

「そんなふうには言わないで。まるで笑つていらつしやるようではありませんか。それに、

笑ってはいけませんよ。ホントの話なのですから。ここに七十五歳のお婆さんが座っているのと同じように、そして当時の私が十八歳の乙女だったのと同じように、その話は事実なのです。そうですね、あなたは、私はすべて話してあげますからね……

\* \* \* \* \*

……私たちはロンドンに滞在していました——父と母、そしてエヴェレスト氏と私です。彼が両親に私も同伴するように説得してくれましてね。どうやら私に世の中を少し見せたかったようです。もつとも、それはホントに狭い世の中でした。というのは、彼は日夜勉強に励む法学生でしたから。彼は私たちの滞在のためにテンプル法学院<sup>(6)</sup>の近くに下宿を借りてくれました。それはC通りの一番奥の家で、テムズ河に面していました。彼はテムズ河が大好きで、勉強がきつすぎて父と母と私をラニラ・ガーデン<sup>(7)</sup>や演劇に連れて行けない夕方などは、よく私たちと一緒にテンプル・ガーデン<sup>(8)</sup>に沿って散歩したものでした。あなた、テンプル・ガーデン<sup>(8)</sup>に行かれたことは？ 今はすてきな所になって、喧噪の真つただ中にある静かな、鬱蒼<sup>うっそう</sup>とした、人目につかない場所ですが、大きな樹木を通して星がきれいに見えますわよ。もつとも、私が娘だった当時とは、ずいぶん違った感じになってしまいました……

そうですね！ 同じであるはずがありません。

……私の記憶では、三人が——母とエヴェレスト氏と私が——最後の散歩をしたのは、テンプル・ガーデンでした。母がバースの実家に帰る直前のことです。虚弱な母は賑やかなロンドンに耐えきれず、早く帰りたくて気が休まらない様子でした。おまけに、実家には子供たちがたくさんいて（私が一番上でしたが）、一ヶ月かそこらすると、また末っ子が生まれるということで、私たちは心待ちにしていました。それにもかかわらず、母は私と一緒に歩き、幸せ一杯の元気な娘が見たいと思うような展示会や観光地へ一緒に行くってくれ、私と同じように大喜びで見物していました。

でも、その晩の母は顔が青白く、かなり心配そうで、何としても実家に帰ろうと決めているみたいでした。私たちは母を説得して、そうさせないように、できるだけのことをしました。なぜなら、今回のロンドン訪問における一番の楽しみが、その翌々日の晩に予定されていたのですから。ドルリー・レーン<sup>(9)</sup>でジョン・ケンブルとサラ・シドンズが出る『ハムレット』を観ることになっていたのでですよ。そのことを考えても御覧なさい、あなた。ああ！ 今ではあんな舞台を見る機会は絶対ありません。真面目な父でさえ行きたがり、帰郷の時期を延ばした方がよいと、穏やかな口調で私たちに勧めたほどです。とはいえ、母の心は決まっていました。

とうとうエヴェレスト氏が口を開きました。私は彼が立っていた場所を今でも指さすことができませんよ。テムズ河の水が——その時は満潮でした——家の壁にひたひたと寄せて、夕陽が向こう岸のサザーク<sup>(10)</sup>の家並みを照らしていました。彼は次のように言ったのです——それは、もちろん、とんでもない間違いでした。とはいっても、その時は恋をしておられたのですから、勘弁してあげないといけませんね——

「お母様」と彼は言いました。「こんなことは初めての経験です。お母様が自分のことだけを考えられるなんて」

「自分のことだけですから、エドマンド？」

「すみませんが、二日間だけ、スウエイト先生とドロシーさんをあとに残して、お母様だけ帰郷されるのは不可能でしょうか？」

「あとに残して——あとに残してですって！」母はその言葉をじっと考えていました。「あなたはどうかの、ドロシー？」

私は黙っていました。本当に、私は今まで母と離ればなれになったことなんか、一度もありませんでした。母と別れたいとか、母がいらないのに何かを楽しみたいとか、そんなことは今まで頭をかすめたことさえなかったのです三ヶ月前まではね。「お母様、そんなことは——」

でも、ここでエヴェレスト氏の姿がチラッと見えたので、私は黙ってしまいました。

「どうか先を続けてください、ドロシーさん」

いや、私には続けることができなかつたわ。それまで私たちは一緒にいることができずに、幸せだったので、彼はとてもいらだち、感情を害したような顔になりました。その上、私たちは何年も会えなくなるかもしれないませんでした。当時のロンドンとバースとの間の旅は、恋人にとつてさえ容易ならぬものだったので。彼は一生懸命に勉強していましたが、そうした生活に楽しみはほとんどありませんでした。ですから、私には実際に母の方が我がままだと思えたのです。

私の口は何も語らなかつたものの、おそらく悲しげな目が多くのことを語っていたのでしようか、母が状況を感じ取ってくれました。

母は私たちと一緒に二、三ヤードほど歩きました——ゆっくりと、考え深げに。桜色をした頭巾のリボンの下から見えていた母の青白い、疲れた顔が今でも思い浮かびます。若い頃はとても目鼻立ちの整った女性だったそうですが、その時も非常に美しかったですよ——ああ、大切なお母様！「ドロシー、この議論はもうおしまよ。とても残念だけど、私は帰郷しなければならぬわ。でもね、あなたと一緒に週末まで残ってくださいるように、お父様を説得してみるわ。それで満足かしら？」

母の子として衝動的に私の心に浮かんだ最初の返事は「いいえ」でした。ですが、エヴェレスト氏が懇願するような顔で私の腕を締めつけたので、ほとんど意志に反して「ええ」

と答えてしまいました。

母はエヴェレスト氏の喜びと感謝の言葉に当惑した様子でした。もうしばらくの間、母は彼の腕に寄り添って、散歩をしていました——彼のこと大好きだったのです。それから、河辺に立って上流と下流を見ていました。

「これがロンドンでの最後の散歩になりますね。いろいろと私の世話をしていただき、ありがとうございます。私が帰郷したあとは、特にドロシーの面倒をお願いしますね。ああ、必ずよ」

この母の言葉、そしてその時の口調は、私の心に強く銘記されました。最初は、母の私に対するような思いやりの心が私にはなかった、という後悔の念が混ざったような感謝の念からでした。その後、でもね、その後のことでよくよく考えすぎると、私たちは往々にして過ちを犯すものなのよ。私たち、神ならぬ人間は、「今現在」のことだけに対処すればいいの——その後のことには関与しないでね。このような場合、自分だけに対処も他人を責めることも、私はしないことにしています。何であれ、済んでしまったことは、それで正しかったのですし、間違いであったはずはないのですから。

次の朝、母は帰郷しました——ひとりです。数日後に私たちは母に続いて帰る予定でした。もっとも、母は私たちに日時を決めさせてくれませんでしたけれど。母の出立は慌ただしいものでしたので、私はまったく覚えていません。ただ、何か具合の悪いことがあれば、す

ぐに知らせるようにという父の懇願——というか、ほとんど命令——と、それに対する母の返事だけは心に残っています。

「いかなる状況下でも、おまえ」と、父は繰り返して言いました。「約束してくれるね？」  
「約束しますとも」

母が帰ったあと、「あんなに真剣に約束する必要もなかったのに」と父は言っていました。それは母を乗せてバスに向かった鈍行馬車が手紙を持って戻ってきたら、すぐに私たちも家路に就くはずだったからです。おまけに、何事も起こりそうにはなかったのですから。ですが、幸福な結婚生活において、母と離れることには慣れていなかった。父はたいそう気をもんでいました。たいていの男性と同じように、父は自分以外であれば誰でもすぐに非難する性格だったので、その日はまるまる、それから次の日も、時おりエドモンドと私の両方に不機嫌な顔をしていました。でも、私たちは我慢しました——気長に。

「劇場に連れて行けば、丸く収まるよ。お母様のことを不安に思う理由なんて全然ないのだから。なんて大切に、大事にされているのだろう——君のお母様は、ドロシー！」  
自分の恋人がこのように言ってくれるのを聞いて、それはもう嬉しかったわ。私のように恵まれた若い女性はいないだろうと思いました。

さて、私たちは観劇に行きました。ああ、本物の劇がどんなものか、お分かりにならない

いでしょうね、最近の若い人には。ジョン・ケンブルとか、シドنز夫人は見たことありませんよね。もつとも、その時に観た劇は、私と一緒に連れて行ってくださった先週の『ハムレット』に比べると、衣装や道具立ての点ですつと見劣りしたでしょう。この上なく厳肅な場面で幽霊が酒を飲んでいたことが明らかになつた時は、思わず笑いそうになつたのをはつきりと覚えていますけど。不思議なことに、それとの関連で以後に起こつたどんな出来事も、結果として起こつたどんな事件も、この初めて観た劇の鮮やかな印象を私の頭から追い払うことは、一度もありませんでした。同様に不思議なのは、その劇が事もあろうに『ハムレット』だつたことなの。シェイクスピアは信じていたと思いませんか？——いわゆる幽霊の存在を……

私には分かりませんでした。ですが、すぐにマツカッサー夫人の幽霊が登場するなど思いました。

「駄目よ、あなた——駄目よ、絶対に笑わないでね」

夫人は見るからに動揺しておられました。話を続けるには努力が必要な様子でした。

……あなたには、その晩の私の状況を正確に理解していただきたいの。まだ私は若い娘で、頭は魅惑的な舞台のことで一杯、心は同じように私を夢中にさせる別のことで一杯だつ

たのよ。エヴェレスト氏と一緒に食事をして、私たちは二人とも最高に上機嫌でした。事実、父はグリモールデイ氏<sup>(11)</sup>の戯けた仕草を思い出し、腹を抱えて笑いながら床に就いていました。この道化師のせいで女王やハムレットが父の記憶からほとんど消し去られたことを考えると、馬鹿げたことの方が恐ろしいものや崇高なものよりは、いつも父の記憶を強くとらえていたようでした。

私は——ええつと——窓辺に座って、ブラシで私の髪から髪粉<sup>(12)</sup>を払っていた女中のパティーとおしゃべりをしていました。半分ほど開いた窓はテムズ河に面していて、とても暑い、星がたくさん見える夏の夜でしたので、ほとんど戸外に座っているような感じでした。音という音が拡大されて聞こえ、影という影が生きているように見える、そんな真夜中の閉ざされた部屋に孤立していたわけですが、畏怖の念を呼び起こされることはなかったと思います。

先ほど言ったように、私たちは談笑していました。だって、パティーも私もまだ若かつたし、彼女にも恋人がいたので、当然そうなりますよ。家の他の召使いと同じように、彼女もエヴェレスト氏の熱烈な崇拜者でした。ちょうど私が彼女のエヴェレスト氏に對する称賛の言葉に微笑と叱責で対応していたとき、セント・ポール大聖堂<sup>(13)</sup>の大時計の音が静かな河の向こうへ鳴り響いて行きました。

「十一時」と、数えていた。パティーが言いました。「遅うなっちまいましたね、ドロシー

お嬢様。バースなら、考えられん時刻ですよ」

「お母様は一時間前に床に就かれたことでしょう」と私は言いましたが、母のことを忘れてしまっていたことに少し自責の念を抱きました。

次の瞬間、女中と私は同時にキャツと叫んで立ち上がりました。

「聞こえなすったかね？」

「ええ、コウモリが飛んできて窓にぶつかったのね」

「でも、格子窓は開いとりますよ、ドロシーお嬢様」

そのとおりでした。あたりには鳥もコウモリも、生きたものは何もいなかったのです。ただ、静かな夏の夜、河、そして星だけでした。

「まちげえなく聞こえましたよ。誰かが軽くトントンとたたく音に——ほんのちよっぴりだけ——似とりました」

「馬鹿なこと言わないで、パティー！」

とはいえ、確かにそれは私にもそんなふうに聞こえました——コウモリだと言いはしませんが。それは本当に人間の指が——母が庭の花畑に入るとき、外から自宅の勉強部屋の開き窓をよくトントンとたたいた、あのとても手触りの柔らかな指が——窓ガラスに当たる音にそっくりだったのです。

「お父様はお聞きになつたかしら。あれは——鳥よね、パティー。お父様の部屋の窓にも

ぶつかったかもしれないわ——ね」

「まあ、ドロシーお嬢様！」パティーはだまされるような女ではありません。私は整髪を仕上げようと彼女にブラシを渡しましたが、彼女の手はひどく震えていました。私は窓を閉め、パティーと二人で座つたまま、その窓を凝視していました。

そのとき、人が通りすがりに呼び出しの合図をするように、窓ガラスをトントンと軽くたたく音が、もう一度はつきりと、明瞭に、間違ひなく聞こえました。ところが、何も見えません。私たちと戸外の大気や明るい星明かりとの間には、影ひとつ見えませんでした。

私は驚きと畏敬の念に打たれましたが、怖い感じはしませんでした。その音には何とも言えない喜びさえ感じたほどです。ところが、自分の気持ちをはつきりと理解する時間も、ましてや分析する時間もないうちに、父の部屋から大きな叫び声が聞こえました。

「ドリーー！ ドリーー！」

ところで、母と私は二人とも同じ名前でしたが、父はいつも母を昔の愛称で呼んでいました。私の方はいつもドロシーだったので。ですが、私はそんなことを考える間もなく、錠を下ろしたドアの所へ走って行き、返事をしました。

父が、ひとりごとを言ったり、うめいているのは聞こえましたが、その注意を引くためには、相当な時間がかかりました。父は悪夢にうなされやすい人だったからです。痛風<sup>(14)</sup>の発作が起こる前は特にそうでした。それを思い出して、私の最初の不安も半減したので、

ノックを時々しながら、立ったまま耳を澄ませていました。すると、ついに父の返事が聞こえました。

「何の用だね、おまえ？」

「どうかなさったの、お父様？」

「何でもないよ。自分のベッドに戻りなさい、ドロシー」

「誰かを呼んだりしなかった？ 誰かに用があるの？」

「おまえじゃないよ。ああ、ドリー、かわいそうなドリー——そして、父は涙にむせびながら、「どうして私はおまえだけを行かせてしまったのだ！」と言っているように聞こえました。」

「お父様、具合が悪いのでは？ また痛風でしょうか？」（父が母を一番必要とするのは、そして実際に母以外にはまったく手に負えなくなるのは、この痛風の時だったのです）

「あっちへ行つて。ベッドに戻りなさい。おまえに用はない」

ある程度は私が原因で帰郷が遅れているということ、父が腹を立てているのだと思いつてもみじめな気持ちになって退散しました。しかし、パティと私はずっと遅くまで起きたまま、このロンドンで父が痛風の発作に襲われても、介護するのは私たちだけで、母は近くにいないという気のめいるようなことを話していたような気がします。私たちは心細いかぎり、パティが自分のベッドから次のように大声で言うまで、私は最初に注意

を引かれた例の奇妙な現象のことをすっかり忘れていました。

「旦那様は重病じゃねえといいですね。あれは、ねえ、警告として聞こえたんですよ、きつと。ぜつ、たいに鳥だったと思ひなさるかね、ドロシーお嬢様？」

「おそろくね。さあ、パティ、寝ることにしましょう」

しかしながら、私は寝ませんでした。というのは、ひと晩中、父のうめき声が一定の間を置いて聞こえていたからです。確かに痛風が原因だったのでしようが、私たちも母と一緒に帰郷すればよかつたと、その時は心の底から思いました。

翌朝まだ暗いうちでしたが、どこも悪い所がなかったかのように、父が起きて一階へ降りて行く物音を聞いた時の私の驚きは、あなた、すぐ想像できますよね。父は旅行用の外套を着て朝食のテーブルに座り、とてもやつれた哀れな表情にもかかわらず、明らかに帰郷を決心している様子でした。

「お父様、まさかバスに戻られるのではないでしょうね？」

「いや、そうするよ」

「夕方の馬車が出るまでは駄目ですよ」と、私は不安になって叫びました。「そんなこと無理ですわ」

「それなら、馱馬車<sup>(15)</sup>に乗るさ。一時間後には出発しなければならんぞ」

一時間後ですって？　むごい別れの激痛が私の全身に走りました——頭の先からつま先

まで。若い時はね、私はどんな事でも心に強く感じてしまうことが多かったのですよ、あなた。たった一時間！ そのあと、さようなら——本当の別れとは愛情が残っていないくて別れる時なのだということを完全に忘れ、青春の半分を置き去りにしてしまうような、胸が裂けるような別れの言葉——をエドマンドに言わなければならぬ。数年後であれば、エドマンドに——私を愛してくれるエドマンドにさようならと言わねばならないとき、私はこっそり遠くへ行つて、我慢できない苦悶を忍んで泣くことができるかしらと思いました。

その時は、いつものようにエドマンドが朝食にやつて来るまで、一分が一日にも思えました。私の真つ赤に腫れた目と紐ひもで縛られた父のトランクが、すべての事情を物語っていました。

「スウェイト先生、お発ちになるのではないでしょうね？」

「そうだ、そのとおりだ」と、父は繰り返して言いましたが、不機嫌そうにテーブルに寄りかかつて座り、朝食に手をつけようとはしませんでした。

「夕方の馬車まではいいのでしょうか？ 私は王室画家のベンジャミン・ウエスト氏(16)の絵を見るために、先生とドロシーさんをお連れする予定でしたのに」

「王室だの、画家だの、そんなことはどうでもいいよ、君。わしはドリーのいる実家に帰るぞ」

エヴェレスト氏は時には陽気に、時には真剣に、手を替え品を替えて父を説得しました。彼ならば大丈夫だと思い、その説得に私もすがりました。彼はいつも物事をはつきりさせる人で、父よりはずつと聡明で有能だということで、父に対して大きな影響力を持つていたからです。

「ドロシー」と彼はささやきました。「一緒に先生を説得してくれないかい？　ぼくがお願いしているのは、ほんのちよつとの時間なんだよ。ほんの数時間さ。それに、長い別れになる前なのだから」

——ああ、彼が思ったよりも、私が思ったよりも、その別れは長いものとなってしまいました。

「おまえたち」と、父はとうとう大声でどなりました。「おまえたちは二人とも愚か者だ。おまえたちが結婚して二十年たつまで待つてみなさい。私はドリーの所へ行かねばならぬのだ。家で何かまずいことでもあつたに違いない」

私も不安を感じていたと思いますが、エヴェレスト氏のほほえんでいる姿が見えたので、加えて彼の優しい眼差しのせい、「おまえたちが結婚して二十年」と父に言われたとき、顔を紅潮させていたような気がします。

「そんなふうにお父様、お考えになる理由など、果たしてあるでしょうか？　もしあるのですしたら、おっしゃってください」

父は顔を上げただけで、悲しげに私の顔をじつと見つめていました。

「ドロシー、昨晚、おまえを今まさに見ているのと同じくらい確かに、私はおまえの母親の姿を見たのだ」

「それだけのことですか？」と、エヴェレスト氏は笑いながら大声で言いました。「まあ、先生、もちろんそうでしょう。夢を見ておられたのですよ」

「眠りには就いていなかったのだぞ」

「御覧になったとき、どんなふうでしたか？」

「よく実家で寝室に入ってきたように、その時も部屋に入ってきたのだ。手にはローソクを持ち、腕には眠っている赤ちゃんを抱いてね」

「何かおっしゃいましたか？」と、エヴェレスト氏がまた（今度はかなり皮肉を込めて）ほえみながら尋ねました。「いいですか、先生は昨晚『ハムレット』を御覧になったのですよ。先生、ほんとに——ドロシー、ほんとに——単なる夢だったのですよ、それは。ぼくは幽霊の存在なんか信じません。それは常識、人類の英知——いや、神自身さえ蔑ろにする侮辱になりますからね」

エドモンドの言葉はとても真剣で、根拠があつて、愛情にあふれていたもので、私は否応なく同意してしまいました。父でさえ自分自身の弱さを少し恥ずかしく思っていたようです。医者で、一家の主でもある父が、おそらく、辛い料理を食べたことと脳が過度の刺激

を受けたことで生じるような、そんな単なる迷信的な幻想に負けるなんて！ エヴェレスト氏は、私が多少ためらいがちに彼に話した例のもう一つの事件についても、同じことに原因があると思っていました。

「いや、それは鳥だったのさ。鳥以外であるはずがない。この前の春にも一羽、ぼくの部屋の窓から飛びこんできたよ。怪我をしていたので、ぼくが飼ってやり、介護しながら、ペットにしてしまった。とてもかわいい、優しい小鳥で、ぼくはドロシーのことを思い出したよ」

「そうなの？」

「それで、とうとう回復して飛んで行ったよ」

「まあ！そこはドロシーと違いわ」

あんなふうには父が説得されてしまったあとですから、私を説き伏せるのは簡単でした。ということで、私たちは夕方まで留まることにしました。エドマンドと私は女中のパティールと一緒に——主として、ウェスト氏の画廊と私たちの大好きなテンプル・ガーデンの静かな木陰へ出かけました。そして、労して得た四時間とその間の心地よさと引き換えに、あとで計り知れない良心の呵責と悲痛で苦しむことになりましたが、私はその時の自分の罪を完全に赦してやりました。私の大切な母であれば、とつくの昔に私のことを赦してくれたでしょうからね……

ここでマッカッサー夫人は話をやめ、目を拭い、それからまた——つい先ほどまで話していた時よりも、もっと年輩の婦人に特有の事務的な口調で——話を続けました。

「それで、あなた、私はどこにいたのですか？」

「テンプル・ガーデンですよ」

「そう、そうでした……」

\* \* \* \* \*

……それで、私たちは夕食に戻りました。父はいつも夕食を、そのあとは居眠りを楽しんでいたので、この時も落ち着きをほとんど取り戻してしまいました。ただ、睡眠不足で疲れのような表情でした。エドモンドと私は窓辺に座って、はしけ解や渡し舟がテムズ河を下つて行くのを眺めていました。当時はまだ蒸気船の時代<sup>(17)</sup>ではありませんでした。

誰かが家の扉をノックし、父への伝言を持ってきました。当人はぐっすり眠っていたので聞こえません。エヴェレスト氏が何ごとかと確認しに行きました。私は窓辺に立ったまま、河を下っていたマーゲート<sup>(18)</sup>行きの小型船の赤い帆を無意識に眺めていたのですが、エドモンドがいなくなった部屋が、ほんの一瞬とても暗くなった気がして、激しい心の痛みを感じたのを覚えています。

少し長く席をはずしてから、エヴェレスト氏は戻ってきましたが、私の方を見ずに父の所へ直行しました。

「先生、そろそろ出立される時間です」（ああ、エドモンド！）「扉の所に馬車が来います。済みませんが、すぐに発たれた方がよいかと思いません」

父はパツと立ち上がりました。

「先生、本当に今は心配される必要もないかと思いますが、私は知らせを受け取りました。お嬢様がお生まれになったそうです。先生、それから——」

「ドリー、私のドリー！」それ以上は無言のまま、父は帽子もかぶらずに急いで飛び出し、待っていた駅馬車に飛び乗り、行ってしまいました。

「エドモンド！」私はあえぐように言いました。

「かわいそうに——ぼくのドロシー！」

恋人のようにではなく、兄のような優しい抱擁によって——私が首筋に感じた涙によつて——彼が実際に口に出して言ったかのように、母にもう決して会えないということが私にも分かりました……

\* \* \* \* \*

……しばらく間を置いてから、老婦人は途切れた話の穂を継いでくれました。「母は出産で亡くなったのです。あの夜に、窓をトントンと軽々たたく音を私が聞き、腕に赤ちゃんを抱いて部屋に入ってくる母の姿を見たと父が思った、まさにあの時刻に亡くなったのでした」

「赤ちゃんも死んだのですか？」

「その時はそう思われていましたが、あとで息を吹き返したそうです」

「何て不思議な話でしょう！」

「信じてくださいと頼みはしませんよ。それがどのようなにして、なぜ起こったのか、それは何だったのか、私には分かりません。ただ分かるのは、それは確かな事実だったという事です」

「それで、エヴェレスト氏は？」 私は少しためらってから尋ねてみました。

老婦人は首を横に振りました。「ああ、あなたも、初恋の人と結婚するのは非常に、非常にまれである、やがて分かるでしょう。その日から二十年間、私はエヴェレスト氏と会ったことはありませんでした」

「それは間違った——なんて——」

「彼のことを責めないでね。彼の責任ではないのです。だって、その時から父は彼に対して偏見を持つようになったのですから。自然なことですよ、おそらく。それに、物事の

理非曲直を正してくださいさる母も、そこにはいかなかったのですから。おまけに、私は良心がひどく痛み、家には六人の子供たちがいて、幼い赤ちゃんには母親がいませんでした。それで、とうとう私は覚悟を決めました。二十年間たとえ待ったとしても、私の彼に対する愛は変わらなかつたでしょうが、彼は物事をそのように見る事ができませんでした。彼を責めないでね——あなた——責めないでちょうだい。それは物事の成り行きとして、おそらく、悪いことではなかつたのですから」

「彼は結婚したのですか？」

「ええ、数年してね。奥様をととても愛しておられましたよ。私は三十一歳の頃にマッカッサー氏と結婚しました。ですから、私たちはどちらにも不幸だったわけではありません。少なくとも、たいていの人たちと同じように幸せでした。そのあと、私たちは互いに心の友となりました。エヴェレスト夫妻は私に会いに来てくださいますよ、日曜日はほとんど毎週のようにね。まあ、お馬鹿さんね、泣いているの？」

そう、私は泣いていました——でも、幽霊の話のせいではありませんでした。

## 【訳注】

- (1) 新約聖書の「ピリピ人への手紙」二章十節からの引用。
- (2) 『ハムレット』一幕五場で、殺害された父王の幽霊について、ハムレットは親友ホレイシヨに自分が見たのは「真正正銘の幽霊 (an honest ghost)」だったと言った。
- (3) 心霊主義 (Modern Spiritualism) がボストンの霊媒 (Maria B. Trenholm Hayden) によってイギリスに紹介されて流行したのは一八五二年。
- (4) イングランドのエイヴォン州の都市で、二世紀頃にローマの支配下で温泉の街として発展した。この温泉保養地は十八世紀に貴族たちの社交場となった。
- (5) ファニー「フランシス」・バーニー (Fanny [Frances] Burney) は小説家・日記作者で、彼女の家庭小説はオースティンに影響を与えた。『セシリア』(Cecilia, 1782) の中で、養子を迎える条件で大きい遺産を相続したセシリア・ペヴァアリーは、世話になった家の息子——「背が高くて体格もよく、顔はハンサムではないが、表情が豊かな」モーティマー・デルヴィルと恋に落ち、彼の父に反対されるが、結局はハッピーエンドを迎える。
- (6) テンプル騎士団がロンドンに建てた聖堂は十四世紀に閉鎖されたが、敷地にあった四つの建物がイギリス法学院 (Inns of Court) となり、そのうちの二つ (Inner Temple と Middle Temple) がテンプル法学院と呼ばれる。ここは弁護士や裁判官など、専門の法曹人を養成する教育機関で、彼らは

原則として法学院内に居住するように定められている。

(7) チェルシーの王立廃兵院の東側に隣接する公園。もとは十八世紀のラニラ卿の邸宅で、卿の死後は邸宅と庭園が開放され、上流階級の華やかな社交の場となった。

(8) テムズ河に沿って走るヴィクトリア・エンバンクメントに隣接したテンプル法学院内の公園。

(9) 一六六二年にシアター・ロイヤルとして創設されたロンドンの最も有名な劇場。一七九一年に改築された三代目は、セアラ・シドンス(Sarah Siddons)とジョン・ケンブル(John Kemble)の姉弟役者が演じたマクベス夫妻で幕を開けた。

(10) テムズ河南岸のロンドン橋とブラックフライアーズ橋までの地区。昔はイングランドの南部からロンドンに上京する旅人の宿泊所が河畔に立ち並んでいた。

(11) パントマイム俳優・道化師(Joseph Grimaldi)。「グリマルディ回想録」(*Memoirs of Grimaldi*, 1838)を編集したディケンズは、彼を正真正銘の道化役者として絶賛している。

(12) ジョージ王朝時代(一七一四〜一八三〇)には、髪粉(本来は加齢を誤魔化すためにメリケン粉を着色したもの)を降りかけたカツラの着用が、特に上流階級で流行していた。

(13) シティーのラドゲート・ヒルにある大聖堂で、イングランド教会のロンドン管区を監督する。

(14) 尿酸が血液中に増えて関節(特に足の親指)に炎症を起こす疾患。かつては皇帝病とか贅沢病とか呼ばれた。

(15) 乗客と郵便物を運ぶ四〜五人乗り四輪馬車で、十八世紀から十九世紀初期に使われた。

- (16) 米国ペンシルバニア州に生まれ、一七六三年に英国に移住した画家 (Benjamin West)。一七六八年にジョシユア・レイノルズと一緒に王立美術院を創設し、レイノルズの後を継いで一七九二年から一八二〇年まで第二代院長を務めた。
- (17) 最初の蒸気船がテムズ河のグレイヴズエンドとロンドン間で運航を始めたのは一八一五年。
- (18) ケント州北東部の海辺保養地。当時はヨーロッパ大陸へのフェリーや漁船の港町の一つだった。

### 【作品と作者について】

本邦初訳。原題は「C通りの一番奥の家」(The Last House in C Street)で、初出は『フレイザーズ・マガジン』の一八五六年八月号。翌年にハースト・アンド・ブラケット社から二巻本で出版された『新しきものなし』(Nothing New)に再版収録された。

作者ダイナ・マロック (Dinah Mulock) は非国教会の牧師の娘として、一八二六年四月二十日にイングランド中西部スタフォードシャー州の製陶の市、ストーク・オン・トレントで生まれた。無責任だった父が失職すると、彼女は私立学校の経営を始めた母の手伝いとしてラテン語を教えた(フランス語とイタリア語にも通じていた)。三九年に一家はロンドンに移るが、四五年に母が死ぬと、父は彼女と弟ベンを捨てて失踪した。父の無責任さを受け継いだ弟もしばしば仕事で失敗し、六三年に収容所で死んだ。



一方、ダイナ・マロックは創造的な想像力のある機略縦横の女性で、詩や短篇小説を書いてロンドンでも自活することができた。すぐに、第一作の『オジルヴィー家の人々』(*The Ogilvies*, 1849)や『ジェイン・エア』とよく似ている『オリヴ』(*Olive*, 1850)によって、彼女は小説家としてかなりの成功を収めた。彼女の小説に登場する多くの人物の特徴として身体障害がある。感受性が強くて女性的な身障者、フィーネス・フレッチャーによって語られる代表作『紳士ジョン・ハリファックス』(*John Halifax, Gentleman*, 1856)は、刻苦勉励して紳士になる孤児の物語で、紳士とは生まれや財産ではなく、教養や志にあることを説いたもの。その他、「亡妻の姉妹に関する条例」(一八三五年)に焦点を当てた『ハンナ』(*Hannah*, 1871)や「既婚女性の財産に関する条例」(一八四八年)を支持する『素晴らしき女性』(*A Brave Lady*, 1869-70)など、社会的な価値の高い小説もある。

ダイナ・マロックは三十九歳のとき、十一歳年下のグラスゴウの会計士(*George Lillie Craik*)と結婚したが、この夫もまた鉄道事故で片足を失った身障者であった。二人には子供がなかったが、一八六九年に捨て子の女の赤ちゃんを養子にした。母性や母の愛は彼女の小説に通底する主題の一つである。八七年十月十二日に心不全のために六十一歳で死去した。